秀友新聞

発行責任者
大橋事務長
第3号
発行日
平成29年5月30日

新任医師のご紹介

脳神経外科　藤原 雄介 医師

四月から札幌秀友会病院に着任した脳神経外科の藤原雄介と申します。簡単ではございますが、自己紹介をさせて下さい。

札幌市に生まれ、市立伏見小学校を卒業後、私立北嶺中・高等学校に入学しました。北嶺中・高等学校は文武両道を目指している学校ですが、私は主に武の方に力を入れていました。校技である柔道は高校一年生の時に黒帯を取得し、ラグビーはラグビー部に交じって大会に参加し、高校一年次の全道大会で優勝した時のメンバーでした。それとは別にサッカー部に所属し、将来はJリーガーになりたいと夢見ていました。高校卒業後はJリーガーを目指して、当時大学サッカー界でNo.1と言われていた筑波大学に入学。学部は将来性を考えて工学システム学類を選択しました。私が入学した当時の筑波大学サッカー部はレギュラー＝将来のJリーガーと言っても過言ではなく、全国からプロサッカー選手を目指して百人以上の部員が入部していました。そこで周囲のレベルの高さに圧倒され、次第にサッカー選手という夢は諦める事になりました。

就職先を考えていた時の事ですが、私は中学生の時から腰痛や骨折などの怪我に悩まされる事が多かったため、スポーツドクターという形で選手をサポートする側に回ろうと思い、再受験の後に筑波大学医学部に入学しました。入学当初は整形外科医を目指していた私ですが、学生時代の臨床実習や初期研修医時代に脳神経外科に魅了され、筑波大学附属病院脳神経外科医局に入局する事となりました。脳神経外科医になってからはドクターヘリの基地病院や年間何千台もの救急車を受け入れているいわゆる三次救急病院で昼夜を問わず、急性期脳脊髄疾患の治療に携わってきました。

急性期病院の役割はその名の通り、急性期の患者さんの治療を行う事です。そのため、急性期治療が終了した後は直接自宅に帰れる患者さんは自宅退院となり、その後の治療はかかりつけ医を持ってもらい、依頼する事になります。また、自宅に帰れない患者さんは回復期リハビリテーションを経て、自宅退院を目指してもらうために転院となります。そんな生活を数年間送っていた事や医局人事の都合上、数年に一回の転勤があったため、お互いが信頼関係をもってずっと付き合っていける患者さんが私にはほとんどいませんでした。

当院の方針は「急性期医療から在宅療養まで」です。急性期治療から回復期リハビリテーション、在宅での療養までを一つのグループで行える病院は全国でも珍しく、素晴らしい事だと思っています。私も今後は少しでも多くの患者さんに信頼していただき、急性期医療から社会復帰・家庭復帰まで一貫した医療に貢献できればと思っています。

私は主に脳卒中を専門としておりますが、中でも脳血管内治療という治療に力を入れてきました。これはカテーテルという脳血管用の一―二㎜の細い管を使って、脳動脈瘤（コイル塞栓術）・頸動脈狭窄症（ステント留置術）・脳梗塞（血栓回収療法）などを治療するものです。近年、脳血管内治療の有用性を示す研究結果が次々と出ており関東・関西地方では主流となりつつありますが、北海道はまだまだ発展途上の段階です。急性期治療から在宅療養までを方針とする当院にとっても、必ず有用な治療となると考えますので少しずつでも広めていければと希望に満ちております。他院で手術を勧められたが迷っている、分からない事・疑問に思う事があるなどご相談いただければ幸いです。

地域に出ていく！

当院リハビリテーション科の活動について、杉原科長にお話を聞きました。

Q、秀友ふじいろ教室での活動以外に、昨年度から地域の介護予防活動にも関わっていると伺いましたが、具体的にどのような活動ですか？

A、現在、手稲区内では十数か所で自主体操グループが活動していると聞いていますが、このような介護予防につながる住民主体の取組みを効果的なものにするため、リハビリテーション専門職（以下、リハ職）の関わりが期待されています。一つの例として、地域包括支援センターと連携しながら、介護予防に資する住民主体の通いの場にリハ職が出向き、参加者の能力を適切に評価し改善の可能性を助言することが挙げられています。

そこで、昨年度リハ科では、どのような助言ができるかを検討する目的で、手稲区にある四か所の自主体操グループを訪問し、運動や認知機能等の身体機能の検査を実施しました。写真はその様子の一部ですが、北海道科学大学保健医療学部理学療法学科の教員や、学生にもボランティアで協力してもらい、延べ十二回実施することができました（図）。参加をしていたある住民の方は、「自分の身体の状況がわかってよかった」、「体操を続けるモチベーションに繋がる」等、この度の取り組みの感想を伺うことができました。ただ単に、運動や認知機能の検査結果を伝えるのではなく、普段行っている体操のやり方の助言が上記の発言に繋がったのではと考えています。今後は、入院患者さんのリハビリのみならず、地域の皆様に健康増進に寄与するような、様々な取り組みを考えていきたいと思います。

リハビリテーション科
杉原　俊一 科長

新採用者オリエンテーションの実施

当法人は四月三日(月)から五日(水)にかけて「平成二十九年度新採用者オリエンテーション」を、札幌秀友会病院四階会議室にて実施し、新卒・既卒・中途採用を合わせ、二十二名の職員が参加しました。

初日、始まったばかりの時は、緊張と不安の面持ちでしたが、次第に打ち解け合い、緊張が解けた様子でした。

今後の活躍を期待しております！

糖尿病外来開始のご案内

平成二十九年四月五日(水)より、毎週水曜日の午前九時から十二時で、糖尿病専門医による糖尿病外来を行っております。担当医はイムス札幌消化器中央総合病院の山浦　英樹医師です。糖尿病や血糖コントロールなど、何かお悩みや心配事がありましたら、お気軽にどうぞ。

阿部名誉院長 退職のお知らせ

永年にわたり、脳神経外科（脊髄）を担当しておりました、阿部　弘　名誉院長は平成二十九年六月末日を持って退職となりました。これに伴い、外来診療は六月二十二日（木）まで

となります。　患者様には大変ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。　尚、六月二十七日（火）以降の診療につきましては、決まり次第お知らせします。これまで多くの方々にご利用頂き、有難う御座いました。

編集後記

最近のニュースとして、政府が新たな大型連休として二〇一八年四月から実施予定で、「キッズウィーク」というものを考えているそうです。例えば本来は夏休みの八月のうち、最後の週の平日五日分の休みを短縮し、その休みを別の月に移動して、親などの大人も一緒に休暇を取れるよう、政府が企業などに強く求め、前後の土日と合わせて家族などでそろって最大九連休が取れるようにします。これにより、有給休暇の取得を促して「休み方改革」を進めるとともに、観光需要を分散して地域の活性化をはかる狙いがあるそうです。

しかし、いろいろと問題もあるようで、一般市民の反対意見も多く見受けられるようです。今後の動向が注目されるのではないかと思います。